

平昌五輪ボランティア活動の成果と 21 世紀のリベラルアーツ教育

朴 ジョンヨン

背景

2020 年夏季オリンピック開催都市については、2013 年 9 月 7 日に東京が開催地域として選ばれ、その翌年の 2014 年 6 月、日本にある 7 つの外国語大学（関西外国語大学、神戸外国語大学、京都外国語大学、神戸市外国語大学、東京外国語大学、長崎外国語大学、名古屋外国語大学（五十音順））により「全国外大連合憲章」¹が締結された。

全国外大連合は、連合を構成する各大学がそれぞれ独立を保ちながら、21 世紀グローバル社会にふさわしい人材の育成のために、各大学に共通する基本理念の実現と各大学の豊かな個性の発展を目指して、教育研究の内容に応じてさまざまな連携を図ることを目的とする。2015 年 9 月の第 1 回目から 2020 年 9 月の第 8 回目まで、全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーを開催し、延べ 2,249 名のボランティア人材を育成してた。

また、実践活動として 2007 年 9 月から 2020 年 3 月まで、159 の国際大会に 1,347 名のボランティアを送り出した。筆者は、こうした取り組みを通じて、学生の「外国語修得への支援」や「言語運用の経験」など「語学学習意欲の向上」に向けた取り組みを進めてきた。朴（2015）は、外国語を日常的に使用できる環境にない日本の学生たちにとって、責任を伴う形で外国語を使うボランティア体験は、「さらなる高度な言語能力獲得への大きな動機付け」、「学習意欲の向上につながっている」と

¹ 全国外大連合憲章：神戸市外国語大学広報事務局 HP より抜粋
<http://www.kobe-cufs.ac.jp/news/2014/16429.html>

述べている。筆者はこのような状況を踏まえ、2018年韓国で開催された平昌五輪ボランティア活動の教育的な意義や今後のリベラルアーツ教育の必要性について、これまでの取り組みを中心に述べる。

1. 国際スポーツ大会とボランティアの重要性

国際スポーツ大会やイベントは、地球規模となっており、五輪・パラリンピックやワールドカップ等でスポーツの国際化、グローバル化は必然である。そういう意味で、国際スポーツ大会の成功には、外国語ができるボランティアの存在は重要である。そうした国際大会の円滑な運営のためにも、外国人選手・関係者のニーズに対応できる人材を養成し、適所に送り出し、大会を支えるボランティアの活躍が大会成功のカギとなる。

国際スポーツ大会におけるボランティアとは何か、その概念について山口（1998）は、ボランティアの「自主性」、「社会性」、「無償性」といった特性に基づき、スポーツ・ボランティアを「個人の自由意志に基づき、その知識や技能そして時間などを進んで提供し、社会に貢献すること」と定義している。本学が取り組む国際大会における通訳ボランティアは、誰かの指示、命令に従って行う受動的なものでなく、あくまで、自由意志に基づいて主体的に行われるものではあるが、他人との関係上、責任が問われるものであり、語学修得を目指す学生たちには、語学・コミュニケーション力や異文化に対する順応力や積極性が求められるのである。

2. 平昌五輪ボランティア活動目的

韓国の社会・文化・言語を理解し、ボランティア活動を通じて学生間の友好親善を図るとともに、グローバルマインドの醸成と語学力・コミュニケーション力、異文化理解力を兼ね備えた人材を育成する。

3. 調査方法

2015年8月より2018年までの全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーに参加した述べ1,758名に対し、アンケート調査を行った結果²をまとめ、2007年から2017年まで、神田外語大学からボランティアとして参加した学生の参加動機と活動後の意識変化等の調査（朴、2011）³をベースにし、平昌五輪ボランティアに参加した67名（神田外語大学学生限定）に対してアンケート調査（5段階評価）を行った。

4. 2018 平昌五輪ボランティア活動の概要と活動の成果

本取り組みは、これまで通じた育成セミナーを受講した学生に対して、実践活動機会として、様々な国際大会にボランティア活動の機会を提供している。

写真－1. 平昌冬季五輪大会のボランティア活動



2016年6月に、全国外大連合は通訳ボランティアを通じた連携を目的に、平昌五輪大会組織委員会と韓国ソウルにて協定を締結し、2018年2月には、全国外大連合

² 朴ジョンヨン（2018）『スポーツと言語から学ぶグローバル「人財」育成～神田外語大学での取り組みとこれからの展望～』神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所 p9～p30

³ 朴ジョンヨン（2011）『国際スポーツにおけるスポーツ通訳ボランティアの成果と課題：神田外語大学の試みと成果を中心にして』筑波大学大学院人間総合科学研究科修士学位論文。

から平昌五輪大会に100名の学生がボランティアとして大会運営に携わった。参加した学生らは、26日間（2月1日～26日まで）ピョンチャン会場に34名、カンヌン会場に34名、チョンソン会場に32名と分かれて、英語を含む多言語グループとして活動を行った。

5. 活動内容

活動の内容は、インフォメーションセンターや紛失物センターでの対応、観客案内、誘導、出入統制、関係者入口対応等広範囲にわたる活動であった。

グラフー1. 平昌五輪ボランティアに参加後の自己評価（神田外語大学生 67 名）



左記のグラフー1 は、活動後に神田外語大学 67 名から行ったアンケート結果（5 段階評価）である。青色は 2 年生、赤色 3 年生、緑色が 4 年生を表しており、紫色は平均点数を表しているものである。平均点として、一番高く示されているのは、「今回の経験は私にとって非常に有意義だった（4.59）」で活動の充実さが窺える。

次に多く示されたのは、「以前より、異文化に対する興味や関心を持つようになった（4.56）」と「参加する前より語学に対するモチベーションが向上した（4.56）」それぞれ同じ平均点が示され、現地でしか体得できない経験によって異文化理解力や語学を学ぶモチベーションがアップされていたことが窺える。

表ー1. 平昌五輪ボランティア活動後の学生の感想（朴、2011）⁴参考に筆者作成

キーワード	学生からの感想文から抜粋
語学・コミュニケーションの向上	英語のネイティブの方々はやはり話すスピードが早く聞き取れないことが何度かあり、まだまだ、英語力が足りないと実感することが出来た。このボランティアを通じて、人との繋がりを感じることができ、それを通じてもっと言語を学びたいという気持ちが沸いてきた
異文化理解力	海外にいるときは海外のルールや言語を積極的に取り入れ、いかに自分のものにするか、ということが大事になってくる。その国のことを知り、言語を使ってコミュニケーションを取っていく中で、ボランティアをする意義を見つけることができた

⁴ 朴ジョンヨン（2011）『国際スポーツにおけるスポーツ通訳ボランティアの成果と課題：神田外語大学の試みと成果を中心にして』筑波大学大学院人間総合科学研究科修士学位論文。

<p>通訳の難しさと 他言語を学ぶ意識</p>	<p>言語が通じない時にボディーランゲージや表情がとても大切だと痛感した。英語通訳で参加したが、韓国語もある程度勉強していけばもっとコミュニケーションがスムーズだったと思うので、次にこういった機会があればその国の言語を学んでいきたい</p>
-----------------------------	--

また、上記の表-1は、活動に参加した学生からの感想が寄せられ、活動後に、学生のコメントから専攻言語以外の言語にも興味を持ち、これまで以上に語学学習に取り組みたい意欲が向上していることが推察できる。その他「韓国のボランティア仲間から現地の風習を教えてもらい、異文化に関心を持つことができた。帰国後に勉強を続けてみたい」など日本以外の外国でしか体験できない貴重な経験を通じて、多様な人々と協調し、異文化の環境に対する適応能力の大切さやその経験を次に生かそうという意識の変化がみられる。

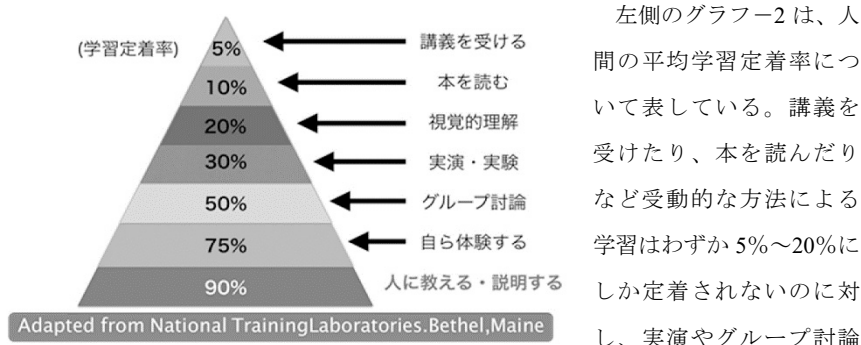
人間の成長について、濱田（2020）は⁵「多様性を肌で感じるからこそ人間を大きく成長させるという信念を持っている。知らない土地に行ったり、日頃接しない人と出会ったりして異質なものにさらされた時、刺激されたり、緊張したり悩んだりする。しかし、そこから成長が生まれる」と述べており、朴（2018）の事前学習（全国外大連携通訳V育成セミナー）から得られたアンケート結果から、関連付けられる回答が多く見られた。また、ボランティア活動の教育的な意味について児島（1998）は「ボランティア活動を通して、対社会との関係、主体性を確立すること、豊かな心を、交流を通して実践的に学び取っていく側面にある」と述べている。

今回の平昌五輪ボランティアに参加した学生たちは、授業でインプットされた知識を、実践の場で試すことによって、対異文化空間の中で、様々な経験をするこ

⁵ 朝日新聞社「メディアビジネス局／制作 AERA ムック編集部」今こそ『よりグローバルに、よりタフに』 <https://www.asahi.com/ads/shingaku/yozeimi/>

によって学習効果がさらにアップしていくことが推察できる。

グラフー2. 学習定着率「Learning Pyramid」(出典：National Training Laboratories)



そして自ら能動的に人に教え、説明することによって学習定着率が 90%まで達していることが明かにされている。

田中（2012）は、日本の学校教育現場における言語教育諸問題について次のように述べている。

「教室で学んだ外国語を教室の外で実践する機会がほとんどなく、事実上すべての「実践」が教室の中で行われることになる。学校で教わったことが実際に役に立つことを実感させることが難しい」と指摘しており、外国語を学ぶ学習者にとって、社会と連携した実践の場（機会）を提供することがいかに重要であるかが窺える。

また、中田（2009）は「語学・技術は駆使すればするほど向上し、向上した能力・技術が社会貢献度を増幅させ、そのことがまた能力・技術の向上意欲へつながる」と述べ、これからの言語教育面においては、教室内でのインプットされた知識を学校外の実践的な活動に生かす機会を与えることが大切である。

このような観点から学生たちは、大学内での授業やセミナーで学んだ知識・技能を外国から来日する様々な人々とふれあい、専攻言語や専門用語を外国人選手に伝

えることの難しさと正しく伝えられた時の喜びを感じ、自分を見つめ直す貴重な学びの場となっている。

6. 今後大学に求められるリベラルアーツ教育について

日本学術会議（2010）は、21 世紀大学の教養教育について「学習を通じて形成される学問知、外国語表現能力、様々なメディア媒体によって形成される技法知、日々の様々な場面で実際活用発揮される実践知に加え、その担い手となりうる市民としての知性・智恵・実践的能力の形成が求められている」と述べている。

広松渉他（1998）によれば、教養は専門的知識とは対比されるべきものであるのに対し、専門とは職業と密接に関係するものであり、教養は職業には直接結びつかないが、すべての職業の根底にある知識であり、何かを暗記すればよいものでもない。ものの見方、考え方、究極には「人間とは何か、世界はどうあるべきか」を考えていくことである。

次に、そもそも教育とは何か、我々はなぜ教育を受けるべきかまたは、これまでの教育とこれからの教育のあるべき姿を探してみる。新村（2008）は、「教育」は、「教え育てること。望ましい知識・技法規範などの学習を促進する意図的な働きかけの諸活動」であると述べる。

近年の大学教育では、「即戦力」を育てようと早い段階で専門教育を行い、専門職を有する人材を育てようとする傾向が見られ、専門以外のことについては興味を持たず、大学に決められたカリキュラムしか受けないのが現状である。

そうした中、理工系・人文社会系の大学の垣根を越えた学びの機会を提供し、そこから学生の好奇心を引き出す自発的な学びが大切であり、21 世紀のリベラルアーツ教育に求められる。

また、今回の平昌五輪ボランティア活動を通じて未来の教育の在り方やグローバル社会から求められる人材像やコロナ禍により、大学の教育方法の部分でもオンラ

イン教育を取り入れた大学との連携や学生交流を活性化できるインフラが整いつつある。

社会と大学の連携はどの大学でも求められている部分であり、先が見えない with コロナ時代や益々多様化していくグローバル社会においてリベラルアーツ教育の必要性が高まってくることは間違いない。

日本経団連（2017）⁶が、毎年実施している「新卒採用に関するアンケート」では、「選考時に重視する要素（五つ選択）」の第1位は1997年の調査開始以来一貫して「コミュニケーション力」であり、次に「主体性」、「チャレンジ精神」、「協調性」、「誠実性」などの人間力を重要視する項目が上位を占め続けている。

さらに、朝日新聞社が実施した世論調査（2011）⁷によると「日本の大学は、企業や社会が求める人材を育てることができていると思うか」と「日本の大学は、世界に通用する人材を育てることができていると思うか」の質問に対してそれぞれ64%と63%が「できていない」と回答している。

このような問題については、AIや人工知能技術やテクノロジーの発展やグローバル化によって複雑化していく社会における答えのない問題を解決するためには、これまでの専門領域に関する知識だけでは足りない。つまり、教養（幅広い知識）に加え、社会の諸問題や課題に対し、さまざまな角度から物事を考えられる柔軟な思考が求められる。

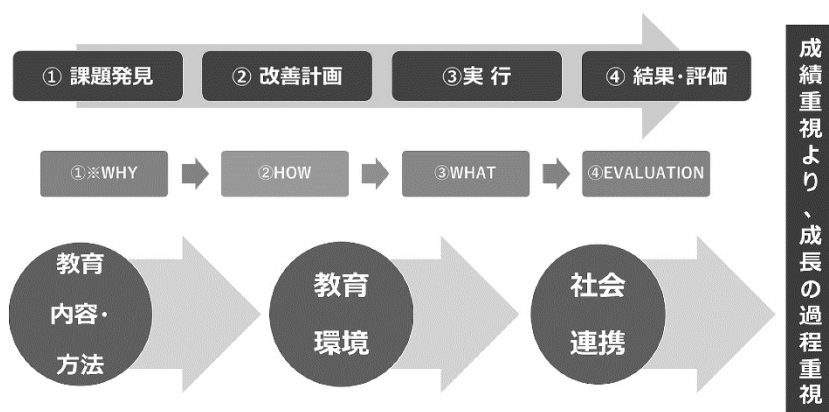
上記の結果から言えるのは、グローバル企業が大学教育に期待し、求める人材育成像には、両者の間隔たりがみられ、大学教育において既存の専門領域に特化知識を伝授するだけでは、現在起きている地球規模の問題や複合的な現象について適切な思考力が養われ難くなっているのではないだろうか。筆者は、これからの大学教育に求められるのは、ただ知識を伝授する機関でなく、グローバル社会に活かし得

⁶ 日本経済団体連合会「2017年度新卒採用に関するアンケート調査結果」（2017年11月27日）。

⁷ 「教育」をテーマにした『全国世論調査』（朝日新聞2011年1月1日付18面）。

る知識を生産する場にならなければならない。経済産業省（2014）⁸では、のなかで、リベラルアーツ教育について言及しており、日本国内でもその重要性が高まり、外国語教育分野においても同様に適用できると考える。

図－1. 21 世紀リベラルアーツ型の教育モデル



上記の図－1 は、21 世紀のグローバル社会のリベラルアーツ教育は、これまでの授業を受け、教員から良い評価を受ける成績中心型から、授業やゼミなどで培われた知識に加え、社会の課題に対し自ら能動的に調べ、改善に向けて何ができるかを考える教育支援が必要である。また、そういった社会との接点を持つことで様々な人々と交流し、ふれ合う経験を通じて、学生の成長過程を重視する教育環境の提供が重要ではないだろうか。つまり、学校・教育機関からは「知識：知っていること、何を理解しているか、何ができるのか」を学び、様々な体験から「知恵：知っているだけでなく、適切に生かす力、できること、理解していることをどう使うか」を得、社会の人間同士での交流を通じて「教養：自分自身を知る」を身に付け教育環

⁸ 経済産業省（2014）平成 26 年 3 月に『『社会人基礎力を育成する授業 30 選』実践事例集』。

境をいかに提供できるかが急務である。

7. 今後の展望

筆者としては、本校においてこれまでの取り組みの成果をベースに、全国外大生に限らず、2018年11月より、首都圏7大学（※神田外語大学、慶応義塾大学、上智大学、筑波大学、東京大学、立教大学、早稲田大学）が連携し、大学領域を超えた幅広い教養や高度な専門領域への理解を深めるスポーツ・リベラルアーツ講座の取り組みも始まっている。

写真-2. 7大学連携スポーツ・リベラルアーツ講座



講座に参加した神田外語大学の4年生は「神田外語大学は文系なので、人間工学やAI等理系分野の講義が新鮮でした。スポーツをいろいろな視点から学ぶことが大事だと実感できた」と言い、文系や理系にとらわれる視点から学問の分野を融合し、学びの楽しさを気づかせ、参加者一人一人の興味・関心を引き出すための教育として考えていくことが大切である。毎日新聞出版（2020）⁹によると、コロナ禍で21

⁹ 毎日新聞社『『週刊エコノミスト（2020）コロナで消える・勝ち残る大学』』（2020年10月15日）
<https://weekly-economist.mainichi.jp/articles/20201013/se1/00m/020/053000c>

世紀の大学教育の在り方について東京大学吉見教授は次のように述べる。「教育オンライン化によって、どこにいても人とつながり、世界中の優れた授業を受けられることが明らかになった。これから目指すべきなのは、地域を超え、国境を越えた、地球を基盤とする大学だ、ローカルな視点で、グローバル問題の解決を目指すことが重要だ」と、つまり、大学の異なる学問分野の教員から文科・理工学系の領域を超越した幅広いリベラルアーツ教育が受けられるようなシステム構築が今後重要であると考えている。

21 世紀に向けて、スポーツのグローバル化・国際化はますます加速するであろう。本学をはじめ、全国 7 外大や首都圏 7 大学の教育連携による社会の諸問題及び課題解決に向けた取り組みは、学問研究の自由や誰もがどこにいても学び得るオンライン化による教育の質（方法や内容）への変化が求められる。

これまでの大学教育は、社会に対し、どのような人材を輩出されてきたのかを検証し、また、学習者に対して、何をもたらしているのか、コロナ禍で、今後大学における教育の質（方法や内容）を高めることによってどのような人材を育成し、社会のニーズにあった人財を輩出できるのか幅広く、多角的に追究されていく必要があるだろう。

参考文献

1. 朴ジョンヨン（2015）『国際スポーツ大会における通訳ボランティア経験と言語運用能力』『日本の英語教育の今、そして、これから』.
2. 山口泰雄（1998）ボランティア活動の広がりと「スポーツを支える活動」の振興（特集 オリンピックと我が国スポーツの振興）.
3. 朴ジョンヨン（2018）神田外語大学 GCI 紀要 6 号特集 pp.9-30 2018 年 3 月「スポーツとボランティア通訳から見えるグローバル人材育成」.
4. 児島邦宏他（1996）『中学校ボランティア活動事例集』、教育出版.
5. 田中一嘉（2012）外国語教育と言語教育—日本の学校教育現場における言語教育の諸問題—群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編第 62 巻 85～96 頁.
6. 中田和子（2009）「ボランティアにおける「利己性」と「利他性」：語学ボランティアのケーススタディを通して」『松本大学地域総合研究』.
7. 日本学術会議（2010）『日本の展望：学術からの提言 2010』17-18 頁
8. 広松渉、子安宣邦、三島憲一、宮本久雄、佐々木力、末木文美士編（1998）『岩波哲学思想辞典』岩波書店、東京、1998、pp.351.
9. 新村出編（2008）『広辞苑第六版』岩波書店、p.722.